

はじめに

本校では、一昨年から「創発のある学び舎」と銘打って、その学び舎でのめざす子どもの姿を追究してきました。”創発”とは、元来、「複雑な系（全体）を構成している各要素（個）が、一見乱雑ともみえる作用を相互にしなが、ある条件下で組織化、あるいは構造化を現出する」ということを意味します。本校は「ともに生きる中で自ら積極的に個や全体に働きかけ、かかわり合いながら新しい自分をつくっていきこうとする活力あふれる学校」を新しい学校として提言していますが、このような学校における集団教育システムに、創発のとらえ方を取り入れて、個と全体との相関の中で育まれる学びと学びの姿を追い求めてきました。今年度の研究では、集団で学ぶことのよさを今一度問い直し、個が全体の中で、自他相互に学びを分かち合い、共有しながら、次の新たな学びを創り上げていく姿のある授業を目指しております。従って、本研究の目的は、そのような授業実践を積み重ねていく過程で、子ども、教師、教室全体、授業内容などの授業構成要素のかかわりの様相から、学びの高まりを見取り、考察することにあります。

子どもは、他者とかかわりの中で自ら考え、試行錯誤を繰り返し、そして自ら学びながら次世代を担うたくましい人間へと成長していきますが、その他者とかかわり方には少なくとも、二つのタイプがあります。第一は、家庭や学校における両親や教師など大人とかかわりです。子どもはそれによって、大人からの支援や指導、教育などを受けつつ、様々な課題に立ち向かい、学習していきます。第二は、地域や学校における同世代の友達やその集団とかかわりです。そこでは、互いに尊重し合い助け合い、時には競い合いながら、知識や情報を交換し、生き方や行動様式、人間関係などを学びつつ、社会性を身につけていきます。この二種類のかかわり方はどちらも車の両輪のごとく、子どもの健全な成長にはなくてはならないものです。

ところが近年、核家族化や少子化、都市化や過疎化などの進行により、地域への帰属意識も地域社会との結びつきも薄れ、地域での第二のかかわり方が希薄になってきました。いわば、地域社会の持つ教育力の低下です。そのため、第二のかかわり方においても、学校、特に小学校の役割はますます重要になってきているといえます。このような状況の下で、集団で学ぶことのよさを追究する本研究に一つの意義を感じております。

また、最近の社会の学校教育に対するニーズは、従来の教育システムでは十分な対応ができなくなるほど多様なもので、とりわけ児童生徒の学力向上のための個に応じた指導が強く要求されています。その結果、少人数学習、補足的な学習などの取り組みに強い関心が寄せられておりますが、このような取り組みによって得られる学びは、やはり一面的なものでしかありません。本研究では、もう一つ、学習集団に発生する「規範」に注目しております。そして、集団学習の深まりと、それによって培われる個々の児童の学びが、その集団に生じた「規範」と相俟って発展していくのではないかと期待しております。

本研究紀要は、そのような「集団で学ぶよさ」に視点を置いた実践研究についての報告です。高覧いただき、忌憚のないご意見とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年11月18日

金沢大学教育学部附属小学校
学校長 島中洋志